#### 法政大学学術機関リポジトリ

#### HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

#### 江戸時代初期観世流整版謡本群の研究(一)

伊海,孝充

```
(出版者 / Publisher)
法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
NOGAKU KENKYU: Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究
(巻 / Volume)
47
(開始ページ / Start Page)
25
(終了ページ / End Page)
54
(発行年 / Year)
2023-03-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026736
```

# 江戸時代初期観世流整版謡本群の研究(一)

伊 海 孝 充

#### はじめに

近世初期に出版文化が開花する。謡本の刊行はそれとほぼ同時期に始まり、 謡本刊本の歴史は慶長期(I 五九六~一六 | 五)から始まる。 豊臣秀吉の朝鮮出兵により、 江戸時代を通じて出版物の中心にあり続 大陸の印刷技術が日 本に伝来し、

が多く、その後万治二年に山本長兵衛が謡本の刊行を始めると、観世流の謡本はほぼこの書肆が独占的に出版すると もとにした寛永卯月本(寛永六年刊記)となる。江戸初期の観世流謡本は、この二つが座標軸となり系統が把握されること 期を代表するのが古活字版の光悦謡本であり、元和・寛永期を代表するのが、整版の元和卯月本(元和六年刊記)とそれを が整版印刷へ移行するのは元和期(1六1五~1六1四)から寛永期(1六1四~1六四四)頃であった。観世流謡本であれば、 版謡本としては、この本の刊行は格段に早く、慶長期ごろの謡本は古活字版が中心である。他の書籍と同様に、謡本 刊本謡本の嚆矢は、書家の鳥養道晣が刊行した整版車屋謡本(慶長六年に後陽成天皇に献上)であると考えられる。ただし整 慶長

が刊行者である

26 と仮称)である。後述するように、この時代に刊行された謡本には、前代と異なる特徴がいくつかあるが、その一つ 本稿で考察するのは、その寛永期から万治二年の間に刊行された観世流謡本(以下、「江戸初期観世流整版謡本群」

観世文庫蔵「正田・北村起請文」、『銕仙』四四○号、一九九六年二月)、身愛自身もある程度関わっていたことが想像される。 とがわかる。 や料紙も豪華である点からも、 あったが、この刊行には正田仁左衛門と北村与兵衛という商人らしき人物が関与しており(表きょし「元和卯月本刊行の背景― 交流があり、 光悦謡本の刊行者として有力視されているのが、 謡にも精通していた人物である。元和卯月本は身愛の高弟であった石田少左衛門が表向きの刊行者で 謡に精通していただけでなく、 出版事業に尽力した豪商の角倉素庵である。 ある程度の財力をもつ者たちが刊行した本であったこ 素庵 には観 両本は装幀 世身愛とも

ていたと考えられる。さらにこの書肆は複数おり、 役者との繋がりもあったかもしれないが、 これに対して江戸初期観世流整版謡本群は、 特に謡を愛好していた形跡はなく、商品の一つとして謡本を制 他の書籍も扱っていた書肆たちによって刊行されている。 同じ版(もしくは覆刻版)を、共有、し、それをかなり広い 彼らは、 作 販売し 階層の

不特定多数に向けて刊行していたと考えられている。

れていない問題点も残されている。本稿では三回(予定)に分けて、この江戸初期観世流整版謡本群を以下の三つの視 流謡本の大きな転換期にあたるのだが、この時代の謡本に関する先行研究はけっして多いとはいえず、十分に解明さ こうした環境で刊行された謡本は、前代のものと比べると内容的にも装幀的にも大きく変容した。 すなわち、 観世

1 江戸初期観世流整版謡本群の書誌的視点の特徴 点から考えていきたい。

屋謡本の位置づけに関する私見である。

2 江戸初期観世流整版謡本群の謡本としての特質

初期観世流整版謡本群刊行に関与した書肆の役割

3

江戸

分析を充実させることで、3を考察する上での有益な視点を発見したい。 二回目は代表的な版本を取り上げ、 謡本書肆に関する資料は僅少であり、 主に1・2について検討し、三回目に3について考察する予定である。 現段階ではどこまで明らかにできるか不透明である。そのため、 1 ・ 2 の ただ

# 一、江戸初期観世流整版謡本群研究の問題点

系・玉屋謡本系・元和卯月本系の三系統があり、この順序で詞章が変化していった。長らくこの歴史が定説となって 九世 、るが、 寛永期以前の観世流謡本史は、 二号、二〇一四年三月・二〇一六~一八年三月)、「光悦謡本再検」(『能楽研究』四六号、二〇二二年三月))。 その中で、 観世身愛の時代にそれらが統一された。その詞章を基にした謡本刊行が始まるが、 稿者はこれまでこの定説に対して、 以下のように略述できる。 いくつかの問題提起をしてきた(「玉屋謡本の研究(二)~(四)」(『能楽研究』三八・四〇 室町時代は大夫系とワキ系の二系統の詞章があったが、 寛永期以前までは光悦謡 本稿に深く関わるのが玉

られるものであった。それに対して、整版本は光悦謡本を下地に「観世黒雪」の章句を用いて改変した詞章であり、 研究で明らかになった。 活字本には奥付などはなく刊行背景は全く不明であるが、 両種は 屋謡本は古活字本と整版本があり、 「玉屋謡本」と呼ばれている。 古活字本は光悦謡本(特に袋綴本)とほぼ同種であり、 後者は前者を版下としているが、 しかし両種は謡本としてまったく異なる性質を持っていることが、 整版本には「玉屋」と刻された印(墨印・朱印)があるため 一部の詞章を改変して制作され 詞章面では光悦謡本の一 種と位置づけ てい 稿者の

27

28 従来指摘されていた通り、光悦謡本と元和卯月本の中間的性格をもつ本だと呼ぶことができる。 整版玉屋謡本には「玉屋」の印があるが、この印には「観世黒雪以、 この整版本をもって「玉屋謡本系」という系統が存在するといえるか、という点に疑問がある。 /章句之写玉屋」と刻されている。ここか

前述のと

たことを「章句之写」としていることがわかる。こうした本を一つの系統として定めることが適当なのかは、 改変するという作り方を踏まえると、黒雪章句本を底本にしているわけではなく、これを用いて一部の詞章を改訂し ら観世黒雪の詞章をもとにしていることがわかるのだが、光悦謡本の異本といえる古活字本をもとに、 0) 詞章を

余地があるだろう。

字玉屋謡本)のような本を黒雪の章句を用いて改訂を加えた詞章であった蓋然性が高いのではないだろうか 違点を踏まえると、 を基にした曲とが混じているらしく、整版玉屋本が古活字本の文句を改めた部分についてみると、 指摘されている。 して刊行されたことになるが、その本が何に当たるのかは定かではない。また、本書の詞章は玉屋謡本との類似性が 基づく謡本であることがわかる。この奥付をそのまま信じるなら、黒雪の正本といえるものが存在し、それを底本に )がある。この本の奥付には「此百番者観世黒雪斎以/章句之正本写之者也」とあり、 同時代にこうした本が複数存在している。例えば、その一つとして鴻山文庫蔵黒雪章句中本(一番綴 表章は「この本は玉屋本系統の詞章である。古活字玉屋本から直接影響を蒙った曲と、 一様ではない」と述べている(『湧山文庫本の研究』 わんや書店、一九六五年)。こうした玉屋謡本との一致点と相 整版玉屋謡本同様に、 黒雪の正本といった明確な底本があったとは考えがたい。 やはり黒雪の章句に 時に前者と、 整版玉屋本

**カ+二冊)がある。この本も光悦謡本を基に元和卯月本で改訂したような詞章であるが、黒雪章句本とも異なっている。** この黒雪章句中本の奥付と覆刻関係のそれを持つ謡本として、 肥前島原松平文庫蔵 「観世黒雪本謡曲」

つは、

も含まれ 新出 ているので、 の古活字玉屋謡本には整版本「杜若」が含まれているが、 整版本ではなく古活字玉屋謡本と接近した環境で制作された可能性が高 それが松平文庫本と同版であり、 同じ装幀

0

₩

奥付 れる寛永十三年仲春刊観世流五番綴本の「井筒」と同版であるが、この寛永十三年本は黒雪章句本と覆刻関係にある 仮 0 名印 部の冊 「此百番者観世左近/太夫章句之以正本/写之畢/寛永十三年/仲春上旬」が刻されているのである が押捺されてい 奥付の関係も非常に込み入っている。 や鴻 Щ 文庫蔵黒雪章句仮名印本(二冊。 る。 なお、 この仮名印本は早稲田大学演劇博物館(五番綴) #筒)にみえる「くわんせこく/せつのしやう/くのうつし」とい 松平文庫本は、黒雪章句本に類似する奥付のほかに、 十一冊)と鴻山文庫(一番綴。 整版 玉 屋謡 所蔵さ

卯月本との中間的な性格と理解されているので、玉屋謡本中心に右にあげた謡本を系統化して把握することも可能 以上のように寛永期頃刊の「黒雪の章句」を写した謡本は、 「屋謡本系」という呼び方で括っていたのが、これまでの研究の定説であった。 しかし、 これらを「玉屋謡本系」と呼んでしまうことには、 複雑な影響関係の中で刊行されていた。 以下の二点に問 玉屋謡本系は、 題がある。 光悦謡本と元 これら 謡 本

謡本がこの たとおり、 なる性格があるといえる。 両者に 直接的 系統の土台になっている、 黒雪章句中本は整版玉屋本と比べると、 な影響 関 係が しかし、 あったとは言い難い。 この本が他の同時代の謡本へどれくらい影響を与えたかは不透明である。 という不明確な理解を認めてしまうことになるのではないだろうか 似ている曲がある一方で、それとは異なる曲もかなり混 こうした謡本群を 「玉屋謡本系」と呼んでしまうと、 整 在してお 版 右に見 玉

らかに光悦謡本系の詞章なので、新たな系統と定めることはできないが、整版本の方は光悦謡本や元和卯月本とは異

これらの謡本が玉屋謡本から影響を受けていると断定できない点である。

玉屋謡本のうち、

古活字本は

明

29

もう一つは各本の成り立ちの問題である。

前述のとおり、

整版玉屋本は光悦謡本の詞章をもつ古活字玉屋謡本を版

三本の比較、 系」と括ってしまうと、光悦謡本時代と元和卯月本時代の間の多様な動態を矮小化してしまうのではないだろうか。 独自性をもっている。この独自性こそが、この時代の謡本を考える上で重要だと考えられるが、これらを「玉屋謡本 のはかわらないが、三本ともその距離感が異なっている。もちろん、三本が一致する曲・箇所もあるが、それぞれが かのように版下を作成したことになる。こうした謡本の成り立ちは、 下として、それを黒雪の章句を用いて部分的に改訂した本である。すなわち、版本でありながら写本を加筆訂正する こうした問題は、「江戸時代初期観世流整版謡本群」の研究にも深く関わっている。というのも、 同時代の版本においては、普通、のことであったとも考えられる。整版玉屋謡本と黒雪章句中本と松平文庫本の 各本と光悦謡本・元和卯月本の比較を重ねてみると、三本は光悦謡本と元和卯月本の中間的位置にある 整版玉屋謡本だけに当てはまることだけではな これらの謡本に

1 装幀が簡素である。

は以下のような特徴が見られるからである。

2 多くの謡本が、「玉屋謡本系」と考えられている。

多くの謡本が、観世身愛(黒雪・暮閑・左近大夫)の章句に拠っていることを謳う奥付等がある。

4 いくつかの謡本には、間拍子が施されている。

3

- 5 複数の書肆から刊行されている。
- 1 の装幀は、 そのためか、良好な状態で現存していることが少なく、表紙は破損し、原題簽が残っていないことも多く、後 多くの本は紺表紙袋綴本の中本となっている。 光悦謡本や元和卯月本のような豪華な装幀は持ってい

その一方で、

書肆が様々な種を、大夫などの許可を得ず、

能楽師の助力も得ず、

自由に刊行していたようにも見える。

重要な課題である。

しては現存伝本が少なく、 人によって改装されている場合も少なくない。それだけ、広い階層に向けて刊行されたことが想像されるが、 どれほど流布したかは詳しい検討を要する

から直接的な影響を受けた種があってもよさそうだが、 2は詞章の系統であるが、先行研究では玉屋謡本との影響関係が指摘されている本が多い。 屋謡本系と言われているのである。 前述のとおり、 それは皆無に等しく、 玉屋謡本系という系統の再検討が必要なら、 部が光悦謡本との関係が 時代的には この謡本群 元和 峁 月本 0) 性

ではなく、多くは光悦謡本系の詞章を身愛の章句をもって改訂しているようである。 格も大幅に見直す必要があるだろう。 依拠している」、 3・4は奥付に関わる点である。 もしくは「写している」旨が刻されている。ただし、 江戸時代初期観世流整版謡本群のほとんどの種には、 前述の通り身愛の正本を底本にしてい さらにこれらの多くは 奥付に観世身愛の 一秘密之 、るわけ 章句に

行者が主導で謡本を制作していたが、 行に関わった書肆も十以上に及ぶ。彼らが、この謡本の制作にどれくらい関与していたのだろうか。 章句」(問題)を刻している点が前代の謡本と異なる点でもある。この革新も寛永期頃の謡本を考える上で重要な点で 5は刊行者の広がりである。 江戸時代初期観世流整版謡本群は、 寛永期以降の謡本 ・の制作背景には書肆の関与が見えてこない場合の方が多い 細かく分けると八十種に及ぶ謡本からなるが、 前代の謡本は刊 刊

31 以 上の 時代の謡本の広がりを考える上で書肆の関与をどのように読み解くかは、 特徴を踏まえて、 主要謡本の書誌的特徴と詞章系統の分析と出版に関与した書肆の役割の二点か

代初期観 世 流整版謡本群を考察していく。まず、前者についての分析から行なうが、その謡本種は以下のものを予定

- している。
- В 正保耶查本 寛永中本
- C 寛永十年三月刊者不明小本
- D 寬永六年大津屋市郎兵衛刊本
- A C・Dを加えて考察していく。 Bは江戸時代初期観世流整版謡本群を象徴する種であり、これを中心に検討するが、それらとは系統の異なる

その後、本研究の中心としたい書肆の役割について考えたいが、資料の不足もあり、考察が難航すると予想される。

それを補うためにも、謡本の内部考証を充実させていきたい。

### 二、寛永中本概説

のように説明している。

江戸時代初期観世流謡本群を代表する種は、「寛永中本」と称される謡本である。この謡本については、 表章が次

寛永後半から慶安頃にかけて多種が刊行された一群の中形本を、寛永中本と仮称したい。共通点は、①袋綴の中 本、②御家流書体で片面七行、③間拍子入で内題なく、④節付様式は卯月本風、⑤奥付が「此本者以観世左近入

道章句/写之并秘密之拍子ゑ附之且/往々所板開之本仮名使誤之/不少今改正者也旹/寛永十年癸酉二月吉日 の形 (年記は諸本で異なる)で、刊語が同じことなどである。すべて粗末な料紙で、表紙は紺または浅葱色、10

海注: 鴻山文庫蔵異書体中本)・17(伊海注: 黒雪章句中本)等と同種同書体の長形刷題簽を貼った冊が多い。本文に仮名を多用し、

33 江

版 17 面 25(伊海注:鴻山文庫蔵寛永六年七月刊者不明一番綴中本)と同系統。 はゆったりした曲と字数を詰めた曲とが混在する。 総じて25の影響が強いらしい。 節付は卯月本系なのに文句は大半の 全曲に 曲 が玉 間 拍子を加えて 屋本系で、

いるの 高 級な半紙 が寛永中本の最大の特色で、 本がまだ間拍子を加刻しない段階で粗末な中本が先立ってそれを加えたことが注目される。 習い事の一種だった間拍子を加えたことが歓迎されて広く流布したのであ

山文庫蔵能楽資料解題 上』法政大学能楽研究所編、一九九〇年)

について注目していきたい められたのか、 傍線部のように、 何に基づいているのかは、 寛永中本の最大の特色は初めて間拍子を刻した謡本であるという点である。こうした工夫がなぜ求 この種の特徴を考える上では重要な問題であろうが、今回は特に次の二点

のが難しい。 伝本すべてが先行する伝本を版下としている。すなわち、 つ目は書誌的特徴である。 後述するように、 先行研究では版高を基に各種の先後関係が判断されている。 右の①~⑤のように、伝本すべてに多くの共通項があるが、 各本が覆刻関係にあるのだが、 伝本の先後関係を把握する 確かに整版本の覆刻関係 単に類似するだけでなく、

を考える上では重要な視点であるが、その点も再考する余地があると思われる。 もう一つは詞章の系統である。寛永中本の詞章は、二重傍線部のように「節付は卯月本系、 文句は大半の曲が玉

屋

完全に一致するわけではなく、 本系」と説明される。 前述した通り、この特徴は黒雪章句中本などこの時代の他本とも共通するが、 曲によって距離感も異なっている。こうした謡本の関係をどのように説明できるの 整版 玉

という点が本研究における重要な問題の一つである。

十年(1 ☆三三)から明暦二年(1 ☆五六)の間に刊行されている。ほとんどの種は数冊しか現存しておらず、すべてが一〇〇 まず寛永中本の書誌的特徴に注目して、 各種の比較考察を行なう。 寛永中本は、 奥付を信じるなら寛永

と表記)のみが、一〇〇曲がセットとなっている(十曲が散逸)。まず、この本の書誌を示す。 曲ほどのセットで刊行されたとは考えがたい。その中で、能楽研究所蔵寛永十年二月中野道伴刊本(以下、「能研本」

能楽研究所蔵寛永十年二月奥付中野道伴刊観世流謡本 十八冊(箱入)

を示す)。 名使誤之/不少今改正者也旹/寛永十年葵酉二月吉日」。所収曲は以下の通り(あ~をは、その曲を所収別種本(後掲) 版心に曲名と曲ごとの丁付を刻す。奥付「此本者以観世左近入道章句/寫之秘密之拍子ゑ附之且/往々所板開之本假 収曲を墨書、 中本。袋綴。 左下に組番号を朱書。内題なし。半丁六行。一行は十~十二字程度であるが、十五字程度の版もある。 五番綴。後補寿字散し観世水模様空押紺表紙(二〇·二×一四·一)。横長大型題簽(七·一×一〇·三)に所

1高砂(函・トトロ)・盛久(園・ヒロ・ロ・セロ・トロ)・仏原・富士太鼓(図)・呉服

2養老(園)・鈴木・柏崎(園)・女郎花(E·四·園)・綱

3邯鄲(②)・景清(函)・誓願寺(国)・浮舟・春栄(あ

4 芭蕉(園·園·園·回·回)・俊寛(国)・鸚鵡小町(回)・千手(回)・ 姨捨

5 松虫・鵺・接待・道成寺(園)・遊行柳(図·园)

6白鬚(5)・

頼政(団・區・基)・源氏供養(函・臣・囚)・西行桜(函・園)・夕顔(あ・園)

7賀茂(臣)・兼平(園)・班女(園・国)・ 阿漕・ 春日龍

8山姥(あ・ほ・配)・角田川・志賀(あ)・野宮(あ・ふ)・通小町(る)

江戸時代初期観世流整版謡本群の研究 (一)

9天鼓(団・囚)・舟弁慶(豆)・采女(졄・圏)・杜若(団・蜃)・井筒 (あ せ

10白楽天・安宅 ②・②・ 江口(園・函)・善界・鞍馬天狗

11桜川(あ・齿)・三井寺(あ・嵒・嵒・嵒・宮)・大会・田村(あ・宮・ま)・

花筐

(B・C)・実盛(団)・自然居士(B・団・固)・放下僧・鉢木(B・図)

13海士(トロ)・忠度(トル)・羽衣・二人静(トル)・鵜飼

12龍田

14難波(あ・〇・西・ら)・ 熊坂・ 卒都婆小町(園)・錦木 葛

16竹生島・敦盛(園・凾)・当麻・ 輪(圏)・清経(圏・団・団)・張良(圏)・善知鳥(団)・皇帝(圏 熊野(m·四)・蟻通

15 <u>=</u>

18鵜羽 ・八島(M·団)・紅葉狩・定家(B·M)・ 猩

17葵上・朝長(例)・軒端梅・芦刈・東岸居士(例

20融(□・図)・ 19老松(あ・お・き・り)・ 通盛(園・區)・楊貴妃・藤戸(厨)・関寺小町(園・園) 藤栄・吉野静・松風(団)・安達原

本来一〇〇曲 の寛永十年本を含めて、 組であったが、二冊十曲 鴻山文庫には五十種に及ぶ寛永中本が所蔵されている。 (11と18)が散逸していることが、 同書を収める木箱の箱書から判明する。 以下、その伝本をあげる。

くつかの種の奥付の写真を後に付す。 (【若林】は『鴻山文庫本の研究』掲載の若林正治蔵本(現所在不明)、【高安】は 【観世】は観世文庫蔵本、 『謡曲講座』「古板謡本」掲載 【河村】は能楽

35 研究所河村隆司文庫蔵本。★は能研本に含まれない曲)。 【演博】は早稲田大学演劇博物館蔵本 (番号は早稲田大学演劇博物館所蔵特別資料目録5『貴重書 能・狂言篇』に拠る)、

**あ寛永十年二月中野道伴刊本** 野宮・二人静・通盛・盛久・山姥・養老/★百万・班女・三井寺・兼平・忠度・芭蕉・老松・皇帝・江 〔鴻五3〕(鵜飼・姨捨・★七騎落・自然居士・春栄・★殺生石・定家・道成寺・難波 龍田

夕顔・鉢木・張良・春日龍神・志賀・関寺小町・清経・★西王母・桜川・柏崎/式三番)【若林:井筒・景清】【高

安16】【演博76:田村】【河村:卒都婆小町】

い寛永十年二月村上平楽寺刊本

〔鴻五3〕 (★花月)

う寛永十年二月三葉印本〔鴻五3〕(采女)

|这寛永十年二月刊者不明本〔鴻五35〕(夕顔

|お寛永十年二月鶴丸印本〔鴻五30〕(老松・誓願寺・芭蕉)

安18】【演博77・78:朝長・三井寺】【河村:清経・八島・★花月・高砂・鉢木】※奥付年記以外、 あと同版

〔鴻五38〕(源氏供養・西行桜・★玉葛・芭蕉/江口・藤戸・熊野)

【若林:定家】 【高

〇寛永十二年三月不明印本〔鴻五40〕(千手・龍田 難波

砂寛永十三年二月新板印本 〔鴻五42〕 (杜若・実盛

|| 変寛永十三年西村又左衛門刊本 ②寛永十三年三月中野道伴刊本 〔鴻五4〕 (通小町・邯鄲) 〔鴻五43〕(鸚鵡小町 · 舟弁慶・盛久) 【演博80:遊行柳】 【若林: 芭蕉

心寬永十四年二月西村又左衛門刊本 [鴻五45] (融 盛久)

**団寛永十五年二月三葉印本** 〔鴻五46〕(自然居士

|世寛永十六年正月中野道伴刊本〔鴻五4〕(井筒・善知鳥・天鼓・三井寺)【若林:八島】【演博81:芭蕉】【演博82

江戸時代初期観世流整版謡本群の研究(-

び寛永十九年二月新板印本

[鴻五5]

過寬永二十年五月不明印本<br/>

[鴻五60]

(野宮)

於實永十六年正月丸印入中野道伴刊本 〔鴻五48口〕 (★小袖曽我・ 桜川

**⑤寛永十六年二月村上平楽寺刊本【河村:自然居士】** 

②寛永十六年六月不明印本〔鴻五4〕(清経)

と寛永十七年正月中野道伴刊本〔鴻五51〕(女郎花・源氏供養)
▽寛永十六年暮秋西村又左衛門〔鴻五50〕(頼政)

若林

賀茂)

**極寛永十七年二月不明印本〔鴻五53〕(杜若)** 

に 寛永十八年正月みのや刊本

〔鴻五54〕

(通盛

頼政

図寛永十八年二月一印本〔鴻五55〕(関寺小町)

因寬永十八年村上平楽寺刊本【観世:敦盛】

の寛永十八年暮春西村吉兵衛刊本

[鴻五56]

(安宅

**は寛永十八年六月三印本〔鴻五58〕(松風・山姥)【河村:★夜討曽我】** 

(天鼓・女郎花・★殺生石・安宅/★弓八幡

△寛永癸未林甚右衛門刊本〔鴻五61A〕(源氏供養)

屆寬永二十一年正月中野道伴刊本〔鴻五61B〕(★百万)

37

み正 起正保二年十一月中野道伴刊本 保二年九月学印本 〔鴻五63〕(富士太鼓) 〔鴻五4〕 (三井寺・高砂・鞍馬天狗) |演博86

蜑

図正保三年三月中野道伴〔鴻五6〕(皇帝・★放下僧)【演博87:融

 亚保三月十月安田十兵衛刊本 〔鴻五6〕 (★咸陽宮・★百万)

☞正保四年正月不明印本〔鴻五7〕(敦盛)※寛永中本か存義 |型正保三年霜月西田勝家印本〔鴻五6〕(三井寺)【演博8:采女】

ら正保五年二月中野道伴刊本〔鴻五77〕(白髭)【若林: |弘正保四年二月村上平楽寺刊本〔鴻五75〕(俊寛・頼政 (:班女)

る正保五年三月不明印本 〔鴻五82〕 (女郎花) り正保五年仲春田原印本

〔鴻五78〕

(盛久・老松)

和慶安二年正月中野道伴刊本〔鴻五8〕(山姥

わ 慶安三年二月本屋吉兵衛刊本 乃慶安二年正月不明印本〔鴻五8〕(熊野) 〔鴻五10〕(遊行柳

過慶安三年季冬中野道伴刊本 〔鴻五 103 (蟻通)

图慶安四年三月本屋弥兵衛刊本 [鴻五10] (三輪

**を明暦二年十月吉田庄左衛門刊本** 

[鴻五107] (三井寺)

ほとんどの種が一~二曲のみしか現存していない。

今回は能楽研究所・

演劇博物館

観

以上のように、

揃本はなく、



此本者以観世左近入道童句 不少今改正者也皆以不便名使器之 寫之并秘密之指子此附之日 寛水子学質二月古日震

意永十年矣酉二月吉日

け

不少今改正者也肯

寫之并秘密之相子及附之且 此本者四観世五近入道童句 往人玩极開之本假名使談文 < き お

第小十二九十 五月吉日 寬水上一次中三月吉日四

寬水十年癸酉二月吉日了外

東京一四五年三月日 な村人を野った 0

八幕秋吉日 西村又方法一 官家八十六紀年六月吉日電

寬水十年癸酉二月吉日2 使得令不少今段正者や皆

宝泉永十八紀年正月吉日 大化年本月吉日

意水、年李已正月吉日 殿

U

えがナラひ体 闘

ż

寬永十三八年二月吉日



かは、寛永中本の問題点を検討してから考えてみたい。 じであることが多く、 世文庫の所蔵本のみの調査であるので、 全種が数十冊からなる揃本であった可能性は低いだろう。また、 刊年・刊者のみを入れ替えて刻されている場合もある。では、どのように覆刻を重ねていたの 他機関を調査すれば、もう少し伝本が増えると思われるが、 奥付は本文だけでなく、 改行箇所など形も同 現存本数を鑑み

# 三、寛永十年二月中野道伴刊本の問題点

表章の研究(『鴻山文庫本の研究』 『鴻山文庫蔵能楽資料解題 ついて疑義が出されてい 寛永中本の中で最も古い年記をもつ本は寛永十年二月中野道伴本である。 る。 この点を精査することが、 寛永中本の実態を明らかにすることに繋がるだろう。 上』。以下、「表稿」と表記)には、 しかも、 能研本のみが百冊の揃本である。 この年記の信憑性に

稿で指摘されている能研本の特徴を整理すると、以下のようになる。

- ①能研本は寛永十年二月の年記をもつが、 実際刊行されたのは享保頃まで下る可能性がある。 原装表紙が 「寿字散し観世水模様空押紺表紙」であることを考えると、
- ③寛永十年以降の年記をもつ本の中には、 ②寛永中本は寛永十年に刊行されたと考えられるが、 刊行した本(函・囫)と同版なので、実際はこのころに刊行された本の版木を再利用して、享保頃に刊行された。 能研本よりも版高の高い種があることから、 能研本と
  あに含まれる
  同版本は
  正保三年と
  五年に 能研本よりも先に刊行され 中 -野道伴が
- ④能研本の版高は、 初刻本と考えられる種のそれと大差があるわけではないので、 初版本に近い本を版下とした覆

た種が複数あると考えられる。

刻本である可能性が高

⑤姨捨・皇帝 度にまとめて開板されたわけではない。なお、揃本の所収曲は偶然的なものである。 ・白髭・盛久のように(やや生硬な書体の本、 蟻通のように柔らかい書体の本を含むので、

百番

が

⑥能研本は、 (て・の)の乱丁を訂正したり、 四の節を詳細にしたりと、謡本として改善が見られる点からも、

本と考えられる。

になる。この疑問点をいくつかの視点から再考し、寛永中本の刊行過程を考えてみたい。 り立ちがかなり複雑となる。さらに、この異なる種がどこかの段階で年記が同一の本でまとまり、伝来してきたこと るだろうか。表稿に従うと、 戸」・「熊野」についての刊行時期は明言していないが、能研本よりも後の覆刻本となり、「江口」よりも後刻本とな 本とし、能研本と同程度の版高の「江口」は覆刻本と推測している。また能研本より版高が低い「源氏供養」・「藤 刊本(例)も複数の冊が現存しているが、表稿では、能研本より版高が高い「西行桜」・「芭蕉」の冊は寛永中本の 永中本があまりにも複雑な過程を踏んで刊行されたことになる点に疑問がある。たとえば、寛永十二年三月中野道伴 表稿での見解は鴻山文庫蔵本を精査した上でのものであり、首肯すべき点が多い。ただし、表稿の推測に従うと、 寛永中本は同じ年記を持ちながら、刊行時期が異なる本が複数あることになり、 本の成 初刻 寛

#### 表紙・米紙

なので、やや豪華な装幀に見える。また、箱入りだったためか、表紙も料紙も他種に比べて格段に状態が良好である。 能研本は五番綴で、紺表紙に型押し模様が施されている点に特色がある。他種はすべて薄手の紺表紙・ に合綴し直したために生じた現象だといえよう。

三つ目は喉の様子である。「高砂」冊、「芭蕉」冊のように、

いくつかの冊では原装表紙らしい紙が喉の隙間

から見

あるので、 題はこの装幀が原装であるか否かである。本の綴じ穴を見る限り改装された痕跡はなく、表紙と料紙の一体感も 表稿では原装と考えられている。ただし能研本は、 以下の三つの理由から後代に改装された本であると断

定できる

この本が元々一番綴本であったものを無理に五番綴に仕立てた証左だといえる。 たと断定できないが、能研本は喉の部分が詰まっており、一行目の節が見えにくい箇所もある。(【写真1】)これは、 だし、五番綴本などでも曲ごとに丁付が刻されていることもあるので、これを根拠に寛永中本が本来一番綴本であ つ目は五番綴という装幀である。寛永中本の他種はほとんどが一番綴であり、 曲ごとに丁付が刻され てい る。 た

二つ目は料紙の変色具合である。能研本は五番綴に改装 【写真1】能研本「柏崎」17丁裏・18丁表

見ると、「海人」冊の「羽衣」、「白楽天」冊の「鞍馬天狗」、

端が切り落とされているようだが、

小口を

されたときに、

合は考えがたいことであり、本来一番綴であった本を五冊なる曲を含む冊がある。これはもともと五番綴であった場「奏上」冊の「のきはの梅」のように料紙の変色具合が異



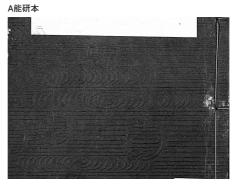
ある有力な証拠だといえるだろう。 られる。 後補表紙と同じ色のため判別しづらいが、 他種の表紙と同質の紙の跡が見られる。 これも能研本が改装本で

では、改装されたのはいつごろだろうか。表稿では刊行時期を享保頃と推測している。 その根拠は特に示されてい

ないが、

同じ寿字散し観世水模様空押表紙であり、 しかも同じ型を用いて打ち出されている。 (【写真2】)

享保十八年(1世三)仲呂山本長兵衛刊本表紙との関係を重視したからだと思われる。この山本本は能研本と



【写真2】





るが、 期にかけて謡本の表紙に用いられており、 <sup>-</sup>水紋」「巻水」などと称される〝水〞を形象化した模様が複数見られる。 この表紙の特色は、「観世大夫の紋所」とも称される観世水の模様が施されている点である。 いつから観世流を象徴する模様になったのか定かではない。 観世流謡本を代表する模様の一つである。 明和年間以降の俳諧関係書にも「観世水」 その中で、 この模様は扇などにも用いられ 観世水は江戸時代末期から大正

謡本には、

「波形

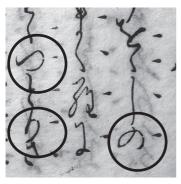
の語が

見えるので、江戸時代後期には広く流布し、定着しているのが確認できるが、これの上限は俄に定めがたい。ただし、

#### 【写真3】



Bめ「皇帝」8丁裏



## 同版本との関係

一研本なのではないだろうか。

表稿によれば、 能研本はあの寛永十年二月中野道伴刊本の大半と、 めの正保三年三月中野道伴刊本とらの同五年二 した表紙を中野道伴やその後継者が作ったとは考えがたいので、後人が山本本の表紙を転用するかたちで整えたのが

本も元禄年間くらいに五番綴へと改装されたのではないだろうか。

元禄三年の年記の信憑性も問題となるが、

あるので、

兵衛刊本(通称

「野田本」)の覆刻曲や、

書体や版式の異なる曲も含んでいる謡本である(表稿参照)。こうした謡本で

六冊。三十番揃。

鴻山文庫五23)。

この本は、

明暦

三年

野

田

弥

観世水模様表紙をもつ謡本の古い例は、

元

禄

刊行年代を引き下げるべき根拠もないだろう。

すなわち、

能研

観世水という後に観世流を代表する模様を型押

三年六月の年記をもつ山本長兵衛刊本である(五番綴、

謡本に関していえば、元禄期くらいまでは遡れる。管見に入った限り、

調査に 月中 山文庫の中には 野 お 道伴刊本と同 W ても、 他 0 同じ結果となり、 一同版本はないと考 .版である。 本稿 鴻 0)

欠損部分が 研本とあ えられ 致を確認することが有効だが、 0 同 致し(【写真3】)、 部 版 関 **め** 係 問題は各種 0 Ĝ 調 查 は複数箇 は 欠損 確実に 部 所 能 0) 分

同版だと判明する。

の前後

関係である。

のようにめの方は、 まず、図と能研本の前後関係は判然としない。欠損部分も同一であり、 欠損が悪化しているので、能研本が先印と考えたい。 刷りの状態もほぼ同じであるが、【写真3】 一方、らは能研本よりも後印と断定してよ

いずれも能研本が先行すると考えられているが、この点は後で再考したい じ理由で覆刻関係になると断定できる(版高は、能研本が2センチ程度高い)。 いずれも能研本の版高の方が高いので、 高が高く、本文も節も細部が明らかに異なる(能研本「柏崎」だけ、 覆刻本だと指摘されている。確かに、全丁にわたって「柏崎」は1センチ、「自然居士」は2センチ弱、 綴であった(河村文庫本も寛永十二年刊本四冊との五番綴本であるが、これも後人による合綴本)。 表稿では「柏崎」(イ)・「自然居士」の と同一である。 後年に印刷された可能性もあるが、 の正保の年記を信じるなら、 次にあとの関係を検討する。この種は寛永十年という最も古い年記をもつ点と、刊者が中野道伴である点が能研本 鴻山文庫本は一番綴のイと五番綴の口に分けられているが、口は後人による合綴本であり、元は一番 欠損部分を比べると、明らかに⑤の方は破損が進んでおり、 能研本は少なくともそれ以前には印刷されたことになる。 装幀・料紙・版面いずれを見ても刊行時期を下げて考える根拠は見当たらない。 最終丁の版心曲目がないという差異もある)。 刷りの状態も能研本よりも悪い。 もちろん、 加えて、「難波」も め・らも正保より 能研本の版 表稿では め・ら みが

桜」「芭蕉」・⑤の「老松」「西行桜」・〇の「龍田」「難波」はあおよび能研本より実際の刊行が早い初刻本と考えら が能研本より先印であると考えられる。 重要なのは
あの刊行年月である。 他冊は |の演劇博物館蔵「田村」・河村文庫蔵「卒都婆小町」を含めて、残りの伝本はすべて能研本と同版で、ほとんど 刷りの鮮明度、 共通欠損部分の侵食具合、 表稿では覆刻本や追加本も古い奥付で刊行されたと考え、たとえば団の「西行 中には、「春栄」「山姥」「養老」のように先後関係が判然としない冊がある 欠損部分の数などから能研より先に刷られたと判断できる。

なっているのが「版高」である。この判断基準の信憑性については次項で検討するが、 付どおりの「寛永十年二月」と考えているようである。この見解は詳細な調査に基づくものであるが、 れている。ただし、表稿では、どの冊かは明言さえていないが、固の中には初刻本も含まれており、その刊行年は奥 稿者はあの種には右のような その基準に

覆刻本も含まれるが、寛永十年二月に刊行された初刻本が多く含まれると考えたい この版高以外に、 | 励には刊行年を考える上で注意すべき差異が二つある。一つは書体である。表稿では、「七騎落

【写真4】あの奥付の一部

であるが、これと同じ書体は「柏崎」(イ)「姨捨」、能研本「姨捨」「善界」など る。これらの冊は確かに、他冊に比べて大ぶりの文字で刻されているのが特徴 「西王母」は書体・版式が他と異なるため、後で刊行された本だと推測されてい

にも用いられている。この書体の差異は刊行年の違いではなく、 題とも考えられるが、ここから各冊の先後関係を推測するのは難しい。 制作過程 0

問

秘密之相子名 種類の奥付が用いられている。(【写真4】)

もう一つは奥付である。表稿では指摘されていないが、あには少なくとも四

W…鵜飼・殺生石・野宮・二人静・盛久・柏崎・定家・芭蕉組・関寺小町組 百万組

Y…自然居士 難波

X…姨捨・七騎落・春栄・道成寺・通盛

・山姥

秘密之相子名 Z…夕顔 細部を点検すると明らかに異なる。

瞥ではすべて同じに見えるが、

状態が悪

江戸時代初期観世流整版謡本群の研究

秘密之相子及。

差異が刊行順を示しているかは判然としないが、 刷りが不明瞭な冊もあるため、 判断に悩む箇所も多い。Wはさらに二種類に分かれる可能性もある。この奥付の あの刊行時期が一様でないことの証左だと言える。<br />

#### 【覆刻関係再検 版高と節付

われている。すなわち、三~四センチも版高に差異が生じている場合は、 の根拠となっているのが「版高」である。整版本の覆刻本は、版下にした版よりも一センチ程度版高が低くなると言 前項で、年記が寛永十年以降でも初刻本と考えられている種があることを述べたが、たびたび触れているようにそ (【写真5】) 何度も覆刻を繰り返した結果だと考えられ

るかが問題である。 後関係を特定する絶対的な基準にな いえるが、この版高の高低が版の先 版高が高い種の方を初刻本と判じて 種の先後関係を推測しているので、 これは客観的な断定方法だと たとえば、 堀川

この考え方に基づいて、

表稿は各

限りません」と説明されている。版高は初刻か後刻かを判断する一基準ではあるが、絶対的な規範とはいえないので、

和紙は他の原因でも伸縮するので、

常に当てはまるとは

覆刻の方が元のものよりも数ミリメー

から一センチメートル程度小さくなると言われますが、

『書誌学入門

古典籍を見る・知る・読む』(勉誠出版、二〇一〇年)では、「一般的に、

異なる。

各本3cm程度版高が

る場合は、

版高だけでなく、

他の視点から精査する必要がある。

老松」の同版と考えられている丁でも、

考えるべきだろう。このように、寛永中本では覆刻という理由以外でも版高の差異が生じているようである(あ

センチ程度の版高の差異が見られる)。

すなわち、

初刻か後刻かを判断

す 0 同じ箇所に傷があることがわかる(【写真6】)。

された根拠はもちろん版

高の差異であり、

丁目の

みが能研本より後刻であり、

あとは同版ということになるだろう。しかし、この一丁目の

これは異版本では起こりえないことであるので、

この一丁目も同版と

第一丁目のみ能研本の版高が二センチほど高い。

これを踏まえると、

あ

0

版

面を比べると、

あ

0

「老松」

が第一丁目 異版本も含む。

0)

み能研本と覆刻関係にあり、

けではなく、

その中で、

注視すべきは同版と異版が混在していると判断された冊である。

他丁はすべて同版であると考えられてい

る。

このように判

表稿では

他

の観点から点検することも必要だろう。

まず能研本と同

]版関係にある|あ種から|再検してみた

61 前

述のとおり、

あ

宣は全冊

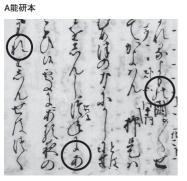
が

能研

本と同

版であるわ

#### 【写真6】



あ

るので、

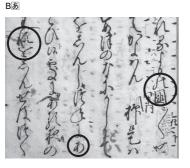
本文には違い

はない

節

両

0



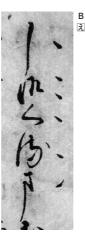
両本を比べると、能研本の方が、欠損具合が 進んでいる。

ある。 取り上 の寛永十年二月刊者不明本 では、 この本は、 げ、 表稿で初刻と判 検討してみたい。 あ P 能 研 断され 本に比べ 「夕顔」 まず、 た種 7 で え を

一セン 種 版 は 高 他 チ弱版高 0 iz 違 も違 V 0 が高 み V が 指 摘され あ 1 る。 表稿では、 てい 覆 刻関 が る 係に が

### 【写真7】「夕顔」7丁裏3行目





作る時、本文は忠実に版下とした本を再現しているが、節付は修正してい

節付に差異がなくてもゴマ点の雰囲気がかなり変わっていることもあるの

るか、後から別に刻している可能性もある。

覆刻関係にある本を比べると、

あが誤刻していると推測される(節を改めたわけではないだろう)。こうし と比べると、②の方が光悦謡本・元和卯月本と同じであるので、能研本 下げに関する異同が三、四箇所に見られる(【写真7】)。 これらを他の謡 たくなるが、そう単純に捉えることにも躊躇される。寛永中本は覆刻本を た差異を踏まえると、
あの誤りを
込が修正した、すなわち
あが初刻と考え 丁裏三行目の「る」のように(その下「ま」は後人の直シ)、ゴマ点の上げ 付に僅かな違いが生じているのである。例えば三丁表五行目の「雨」、七

可能性もあるので、これだけの材料で先後関係は判断しがたい。 で、本文だけを覆刻し、 

所が半々程度なのである。 この異同箇所を光悦謡本・整版玉屋謡本・元和卯月本と比較すると、この三本があと一致する箇所と別と一致する箇 子・トルの差異、 同じく初刻本と考えられているのが、能研本・あよりも二センチ弱版高が高い寛永十二年三月中野道伴刊本「西行 (か)である。 振りゴマの有無など、異同が五箇所程度あるが、やはりこれらから先後関係を考えるのは難しい。 この冊とあの節付を比べると、ゴマ点の表記(ハネゴマ・平ゴマ・下げゴマの違い)の異同 この結果は、 表稿で初版と判じられた寛永十二年三月林印本「老松」「西行桜(函と同版)」 間拍

(逐)、寛永十三年三月中野道伴刊本「鸚鵡小町」(豆)、寛永十四年二月西村又左衛門刊本「盛久」(Ū)、寛永十五年

ただし、それ以外の差異の中には、

以下の二例のように注視すべきものも含まれる。

あ

推測した場合、

#### 【写真8】「源氏供養」 14丁表1行目



B か



(世)も同じである。 異同数には違いがあるが、 やはり節付の異同から、

一月三葉印本「自然居士」(団)、寛永十六年正月中野道伴刊本

「善知鳥」

あ

る。 表一行目)のみ能研本との異同があるが(【写真8】)、例は光悦謡本・ より初刻であると断定できるほどの根拠は見いだせない。 さらにこのことは、能研本・固が初刻と考えられている本でも同じであ 例えば、 かの「源氏供養」(版高は能研本が三センチほど高い)は一箇所(十四

整版

能研本と五箇所程度の異同があるが、 節付の異同が適切に説明できないのである。同じく、 卯月本の節付と一致するのは半数程度なのである。 はいえ、卯月本に近づいた能研本の方が後刻と考えたくなるが、 玉 からは能研本が初刻と推測されている。 屋謡本と一致し、 能研本は元和卯月本と一致する。 かの「江口」(能研本・あの版高はほぼ同一)の節付には このように、 節付面では一箇所と 版高から先後関係を 版 高 0 面

は写本間では頻繁に見られるものであり、 した箇所など様々なケースが考えられる。 こうした複雑な節付の差異には、 誤りを正した箇所、正しかったものを誤刻した箇所、 節付の異同はほとんどゴマ点の表記に関わるものであるが、こうした異同 謡本の系統や制作時期を特定する上で重要な意味をもたないことも多い 新しい節付に基づい

て訂

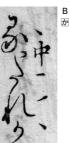
(1)能研本とか 「西行桜」 四 丁表一行目の異同(【写真9】)

(2)能研本・あと別「江口」十四丁表二行目の異同(【写真10】)



【写真9】





A 能研木





【写真10】

「下」とする能研本・あが光悦謡本と整版玉屋謡本の一致 し、「中」とする団が元和卯月本と一致する。(2)は「下」 二例とも音階に関わる記号の異同であるが、(1)は、

例に注目したのは、これらの異同が光悦謡本と元和卯月本 版玉屋謡本と一致し、」がは元和卯月本と一致する。この二 の位置の差異であるが、同じく能研本・
あは光悦謡本と整

研究(四)――玉屋謡本の節付表記をめぐる試論―」、「光悦謡本帖装本再検―版式・分 の間で頻繁に生じるものであるからである (伊海稿「玉屋謡本の

謡本全体の変化に符号する異同が寛永十年と同十二年中野道伴刊本の間に見られることは、重要視してもよいのでは あ所収曲も同じことが言えるかであるが、寛永中本の節付の変化は総数として多いわけではない。その中で、観世流 後刻と考えられる。問題は、現段階ではこの異同が二例しか提示できないことと、「西行桜」「江口」以外の能研本・ るのではないだろうか。すなわち、光悦謡本の節付に近い能研本・あの方が先に刻され、元和卯月本を踏まえた団が 類・刊年・刊行者の諸問題―」)。これを踏まえると、これらの異同は誤植の訂正ではなく、節付の変化に基づく訂正だといえ

#### 小 括

ないだろうか。

以上、 書誌的側面から寛永中本の特徴を考えてきた。右の考察を踏まえると、表稿で後刻本と考えられていた固や もう一つは、

その節付の変化の仕方である。

寛永中本は本文が玉屋謡本系であり、

節付が元和卯月本系と位置づけ

だったと考えておきたい。 からさほど期間を置かず、 も書体の違い、 能研本は、その年記を信用して、寛永十年に刊行された本を多く含むと考えてもよいのではないだろうか。 奥付の違いも見られ、 従来は版高の差異が重要視されてきたが、 刊行されたと推測される。 刊行時期が一様ではないことは明らかであるが、 「期間を置かず」というのは、 むしろ注視すべきは細かな改変が加えられ **砂が刊行される寛永十二年以前** あや能研本の多くは寛永十年 あ の中に

ろに百番ほどの本が刊行され、 しずつ寛永中本の刊行が始まり、 この主張に基づき、寛永中本各種の成り立ちを再考すると、表稿の見解とは逆になる。表稿では、寛永十年から少 その後増補・改訂が進み、 それらが享保ごろに集成されたのが能研本と考えられていたが、 複数の書肆が関与しながら複数の種が刊行されたと推測 むしろ寛永十年ご

これをさらに精査することで、寛永中本の刊行背景がさらに明確になると思われる。

また、右の考察を踏まえると、次の二点の新見が提示できる。 つは、寛永中本がただ覆刻を繰り返してきた本ではない、という点である。

表稿の見解どおり、

寛永中

本は複数

れるのである

る節付の方であり、

あるが、 られる。もしそうであるなら、寛永中本は従来考えられていた以上に、楽譜としてのこだわりが内包された本だとい 囲気は明 回にわたって覆刻が行われた曲もあるが、それらは刊行に関わった書肆が制作した単なるコピー(海賊版)ではなく、 〈改訂本〉と呼びうる本なのである。前述したとおり、本文の文字遣いは同版と見違うほど似ているが、 確に異なっていることが多く、 中には当時の節付の変化に呼応する箇所もあり、 しかもどこかが変化している。 新たに知り得た節付を加え、 前述のとおり、 改良が加えられていると考え それは誤刻であった可 ゴマ点の雰

られてきた。すなわち、観世流謡本が光悦謡本から元和卯月本へと変化する中で、より元和卯月本へと接近した本と るべきかは、寛永中本の詞章が整版玉屋謡本・元和卯月本とどのような関係にあるのかを再検討することで考えてみ いうことになる。しかし、寛永中本の節付の変化(揺れ)は、その公式では説明しづらい箇所がある。これをどう捉え

ぐる研究」(研究課題:20K00349)の研究成果の一部である。 【付記】本稿は、日本学術振興会科学研究費助成金基盤研究(C)「謡本出版揺籃期における書肆の活動と謡本伝播をめ

(未完)